

Ⅷ. 資料その他

学力評価資料（研究開発報告書より）

学力アンケートによる併設型中高一貫カリキュラムの評価の試み

この試みの最初は「21世紀学力研究部会」として2代前の校長の発案がきっかけとなり、研究部会が設立された。当初の研究目的は、学校で求める学力の新たな視点を探ることで、中・高の教員に限らず、大学教員、社会人など、幅広い人々から学力について話を伺い、中・高のうちから育てていかなければならない力について検討してきた。その結果を整理し、確認したことは以下の通りである。

- ・学力の考え方は十人十色であるため、思い切って同意できる範囲で絞り込む必要があること。
- ・少なくとも本校の教育活動で育てることにできるものに限定する必要があること。
- ・反対に、時代の流れで、学校でしか育てることができない力を取り上げること。
- ・大学や社会に出て必要となる力に焦点を当てること。
- ・本校の「併設型中高一貫カリキュラム」の特徴とその学力の関係を明らかにすること。

以上のことを検討し、「8つの学力」と「2つの基礎力」という形でまとめられるのではないかという同意を研究部会の中で得た。そして、本校の研究開発をこの力を物差しとして測り、評価しようという考え方に立って研究を進めた。その力とは、以下の通りである。

- ① 理解する力、② 表現する力、③ 思考する力、
- ④ 人や社会とのかかわる力、⑤ 情報をやりとりする力、
- ⑥ 自分を知る力、⑦ 問題を設定する力、
- ⑧ 問題を解決する力

基礎力① 感性・好奇心、基礎力② 知識・技能

昨年度は、8つの力と2つの基礎力のあり方をもう一度詰め直すとともに、現在の教育学、心理学で新しい考え方の主流となりつつある理論（ガードナーの「MI理論」、ゴールマンの「EQ理論」、スターンバーグの「思考スタイル」）等を学習し、その理論に近い実践を行っている学校や調査を行っている研究機関に視察に行き、本校の定める力との比較、考察を深めた。そして、学力を「学校でつけさせることのできる力」と「生徒にとって将来必要とされる力」と限定した上で、4つの側面と、それらに関連する8つの学びの力を構造化した。この構造化図は、附属学校での多様な実践で培われた学びを捉え、

整理する目的で作成した。その力の概略を以下に説明する。

4つの側面

- 認知的側面 ⇒ 知識（知る）、理解（わかる）の層
- 技能的側面 ⇒ 習熟（慣れる）、活用（できる）の層
- 情意的側面 ⇒ 関心（引かれる）、志向（向かう）の層
- 価値・態度的側面 ⇒ 関与（かかわる）、共感（感じる）の層

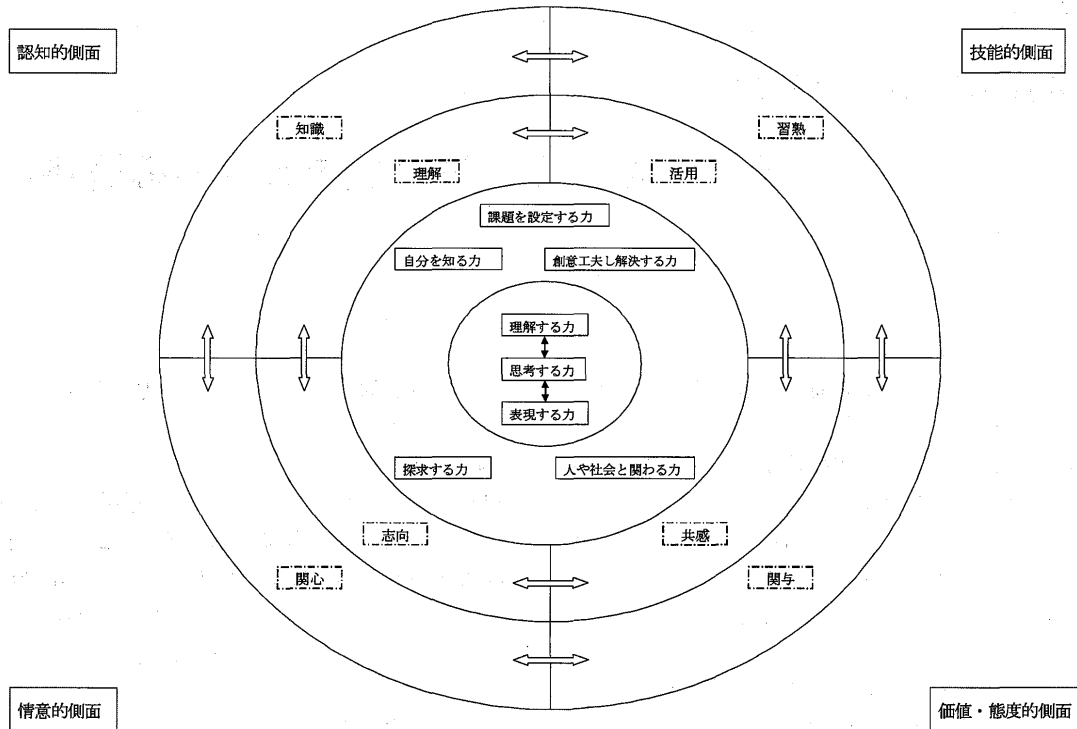
8つの力

抽象性の高い項目

- ① **理解する力** 正確に、幅広く、深く、多角的に、物事を構造化して把握する力とする。
- ② **思考する力** 知識を有機的に関連させ、筋道を立てて考え、共通点を探り出し、物事の（本質）を見つけて考える力とする。
- ③ **表現する力** 自己の感情、思考、意見を正確に、効果的に、創造的に、多様な手段を活用し他者に伝えるのに必要な力とする。

具体性の高い項目

- ④ **課題を設定する力** 問題を分析する力で、物事の共通点や異なる点を理解し、問題の本質を捉え適切に課題を設定する力とする。
- ⑤ **自分を知る力** 自己と世界との関わりを客観的に認識する力で、今の自己を知り、これからの見通しや段取りを付ける力とする。
- ⑥ **創意工夫し課題を解決する力** 与えられた課題や設定した課題を、確かな知識を活用し、適切な方法、多様な手順で解決する力とする。
- ⑦ **探求する力** 深い動機付けや効力感をともない現象を継続的に、探求する力とする。
- ⑧ **人や社会と関わる力** 自己と集団、組織、社会との関係を適切に認識し、自己と世界とのつながりを共感的に多面的にとらえる価値や態度を持つ力とする。



以上の「8つの力」を本校の併設型中高一貫カリキュラムで求める共通の力と規定し、併設型中高一貫カリキュラムの評価をするため、各授業（総合人間科、新教科、ソーシャル、5教科の授業について、統一した力の尺度によって、生徒にその力が付いたと感じているかどうか、アンケート調査を実施した。アンケートの作成は、各授業研究部会、授業実施者、教科の方々に項目の検討をした原案を、本部会で整理して行うという形をとった。その手順は「授業目標」と「8つの学力」を照らし合わせて、ターゲットとなる力（理解する力、思考する力、

表現する力 + a）を選び出し、授業に即した形で質問を考えて、その力が付いていると感じているかどうかをアンケート調査をするというものである。2005年11月14日（月）～24日（木）にかけて、全学年に対して時間を設けて実施した。なお、アンケートでは、思考のない理解や思考のない表現はないという立場をとった。従って、「②思考する力」は単独でアンケートをするのではなく、常に「①理解する力」か「③表現する力」と一緒にした質問をしており、単独でその力を聞くことはしていない。

アンケート結果
(学年別)

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
中 1	総合人間科	3.94	4.07		3.76	/	/	/	4.23	3.90
	ソーシャル	4.16	/		/	4.27	/	/	/	3.51
	社会(地理)	3.19	/		3.66	/	/	2.91	/	/

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
中 2	総合人間科	3.72	3.66		3.46	3.60	3.08	3.55	3.58	
	ソーシャル	3.70	/		/	3.89	/	/	/	3.23
	基礎英語	3.11	2.60		/	/	/	3.54	3.01	

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
中 3	総合人間科	4.44				4.07				4.08
	ソーシャル	4.02					4.24			3.71
	基礎数学	3.38	3.42					3.61	3.09	3.91

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
高 1	総合人間科	3.69	3.78			4.08		3.69	4.04	4.16
	新教科	3.66	3.51				3.34	3.55	3.34	3.61
	学びの杜 (90名)	3.83	3.00			3.49	3.91	3.70	4.06	3.78
	国語総合 (古典)	3.08	2.68						2.56	
	理科総合	3.42	2.81			3.37	3.35	2.94	3.13	

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
高 2	総合人間科	3.92	3.55				3.62	3.21		3.95
	新教科	3.91	3.87				3.49	3.70	3.53	3.69
	学びの杜 (70名)	3.72	3.31			3.44	3.95	3.80	3.88	3.64

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
高 3	総合人間科	4.00	3.60			3.78	3.58		3.75	3.56
	新教科	3.73	3.64				3.39	3.56	3.38	3.69
	学びの杜 (34名)	3.83	3.25			3.78	3.88	3.88	3.93	3.89

アンケート結果
(授業別)

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
総合人間科	中1	3.94	4.07			3.76			4.23	3.90
	中2	3.72	3.66			3.46	3.60	3.08	3.55	3.58
	中3	4.44				4.07				4.08
	高1	3.69	3.78			4.08		3.69	4.04	4.16
	高2	3.92	3.55				3.62	3.21		3.95
	高3	4.00	3.60			3.78	3.58		3.75	3.56

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
ソーシャル	中1	4.16					4.27			3.51
	中2	3.70					3.89			3.23
	中3	4.02					4.24			3.91

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
教科	中1 社会 (地理)	3.19				3.66			2.91	
	中2 英語	3.11		2.60					3.54	3.01
	中3 数学	3.38		3.42				3.61	3.09	3.91
	高1 国語 (古典)	3.08		2.68					2.56	
	高1 理科	3.42		2.81		3.37	3.35	2.94	3.13	

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
新教科	高1	3.66		3.51			3.34	3.55	3.34	3.61
	高2	3.91		3.87			3.49	3.70	3.53	3.69
	高3	3.73		3.64			3.39	3.56	3.38	3.69

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
学びの杜	高1 (90名)	3.83		3.00		3.49	3.91	3.70	4.06	3.78
	高2 (70名)	3.72		3.31		3.44	3.95	3.80	3.88	3.64
	高3 (34名)	3.83		3.25		3.78	3.88	3.88	3.93	3.89

アンケート集計方法と平均の見方

- 各個人のアンケートで、各授業の同じ力を聞く項目の数値をたして平均を出し、その平均を合計して全体の平均を出した。
- 質問は5検法（1まったくあてはまらない、2あまりあてはまらない、3どちらともいえない、4ややあてはまる、5よくあてはまる）で質問をしたので、平均値がおおむね 3.5以上の数値がないと、全体として「力が付いた」とは言えず、4以上の数値になると、はっきりと「力が付いた」と感じているとしてよいと考える。

評価の考え方

- 生徒の実感として「力が付いた」と感じる度合いを、平均値で測る。総人、ソーシャル、新教科を中心に考え、教科や学びの杜は、前者との関連や比較の対象としてとらえる。
- 総合人間科と各教科は、それぞれ学年ごと、授業ごとに設定した目標が異なるので、求める力も違っている。（本当は総合人間科の求める力は同じはずであるが、年度によって重点目標が違うために異なるものとなってしまったと考えられる。）
- ソーシャルライフと新教科、学びの杜は、各学年で同じ目標なので求める力も同じになり、同じ質問項目だったので比較がしやすい。ただし、新教科は受けて

きた授業の分野が高1、高2と違うし、高3については今年度の授業を聞いているわけではないで、厳密に言えば条件が異なるため、比較するのは難しい。学びの杜は全員が受講しているわけではないので、全員が受講した授業との単純比較も難しいが受講した生徒と受講しなかった生徒の、他教科の平均値の比較はできそうである。

各教科の質問の最後に、「自分がこの教科を学んでついたと思う別の力」を自由に記述してもらい、生徒が実感として8つの力以外で、その教科を学んでついたと思う力を知る手がかりとした。

全般的な傾向

- 総人、ソーシャル、新教科、学びの杜といった研究開発関連の授業については、概して平均値が高い。それぞれの授業の今年度の目標から8つの力を割り当てたので、授業の目的の達成度は、概して高いと考えてよいと言える。
- 既存教科の授業の平均値は、これら研究開発関連の授業に対して低くなっており、一部には生徒がねらった力を「ついていない」と感じるような数値もみられる。これは、生徒がそれぞれの教科のテストを受けており、教師による評価を毎回受けていることから、自分の評価を意識して低めにつけたとも考えられる。しかし、総合人間科、新教科、学びの杜等の教育課程や授業手

法の、何を、どのように既存教科に取り入れていくかを検証し実践する必要があるということも同時に物語っていると考えられる。いずれにせよ、今回の評価は生徒の実感を聞いたものである。今後は、「8つの力」そのものがついたかどうかを測る手段も考え、実践して、生徒に還元する必要がある。このことについては今回の取り組みとは別に、理解、思考、表現力を客観的に測る試みも行っている。中3で、数学という教科なのに「⑥創意工夫して解決する力」と「⑧人や社会と関わる力」の数値が高いのは、多様な解法を他の生徒に表現しながら考えていく実践を行ったからである。問題を解く際、生徒に、徹底的に解法の説明を表現をさせ、その内容をこちらで分析する中で、生徒一人一人の思考、表現力を把握するという方法である。総合人間科の授業手法を教科に取り組み、教科の目標以外の力を付けた実践として、今後の研究発展の方向を示した結果となっている。

以下、各授業の分析をしていく。

アンケート分析 (総合人間科) 中1～高3

1. 総合人間科の求める力

総合テーマ「自分の人生を自覚的に選択していく力をつけるために」

(1)教科像

- ・現代の課題を学ぶ、21世紀の社会を見据えた問題
- ・生徒自らの問題意識への発展をめざすフィールドワーク
- ・社会の在り方と自分の人生を重ねる生き方につながる学習

(2)求める力 (学びの関連、学びの意義、学びの発展)

- ・学び合う力 ①理解 ②思考 ③表現
- ・問題を発見し探求し解決する力 ④課題設定 ⑥創意 ⑦探求
- ・行動する力 ⑤自分を知る ⑧人や社会と関わる力
- ※6年間で学力の全てを縦断的、横断的のみならず発展的に構造化できるのが総合人間科である。
- ※各教科を結びつけ、能動的に取り組む発展的な学力として位置づけることができる。

2. 結果 (データ) の概略

(1)各学年の特徴

- ・中1：②③思考表現 (4.07) と⑦探求の力 (4.23) が4を上回り肯定感が強い。中1総合人間科テーマである「出会い」が大きな力を与えている。生徒達は、自分の興味のあることに調べる意欲を見出し、出会いの表現に悩み、その結果、各力が付いたという実感が深まるのである。
- ・中2：⑥創意解決 (3.08) と中高で最も低い値である。中2のテーマが環境問題であることから、身近

な課題で問題の理解はできているが、解決のための行動、自分の日常に悩む姿が伺える。

- ・中3：8つの学力全てに4以上の肯定的な解答が見られた。平和問題に真剣に取り組む学年の反映と、身近な人、地域から学ぶ、グループ研究の成果が出ている。1995年当時の総合人間科初期は中3の肯定的評価は他学年に比べて低い値だった。他の教科、研究旅行との関連が有機的になされてきた成果といえる。
- ・高1：⑧人や社会 (4.16) ④課題設定 (4.08) ⑦探求 (4.04) と4以上の肯定が3分野に及び総合人間科の目標が浸透している。高1のテーマは「生命と環境」だが、高校生としての自立に向けた社会を見る眼、自らの生き方、職業観にまでおよび、キャリア形成と総合人間科の接点が肯定の背景にある。社会との接点を生徒が自ら認識できる目標を定めた結果ともいえる。
- ・高2：肯定度4以上の項目はないが、テーマが「平和、人権、国際理解」といういわば21世紀の課題そのものであり、現在の高校生にとっては重いのだろう。しかし①②理解思考 (3.92) であり平和、人権を自分の頭で理解し問題に意欲的に取り組む姿勢として評価できる。問題は⑥創意解決 (3.21) と中高のなかでは中2に次いで低い。これは平和を観念的な理解、共感から創造していく行動力に悩んでいると分析できる。平和、人権、生徒自ら発信できる学校文化がまだ形成されていないからでもある。
- ・高3：①②理解思考 (4.0) が4を超えている。進路をふまえ自分を分析し、社会人と関わることにより健全な進路観が形成されたと考えられる。一方で⑧人や社会 (3.56) が低い。この項目は中高の総合人間科が自分の進路形成にどんな役割を果たしたかを問うものであり、6年 (または3年) の成果がキャリア形成にどう関連するか詳しい分析が必要である。

3. データから分かる目的達成度の検討

本校の総合人間科は1995年からカリキュラム化され今日まで10年間の積み上げがある。この総合学習が核となり学校づくり、カリキュラムづくり、大学地域連携が組織化された。データをみるかぎり全ての学力との関連は肯定度が高いが学年の格差が大きい。学年の教員構成、問題意識の格差、マナー化からの創造的脱却などの問題も挙げられる。テーマの再構築も必要である。高3の評価が低下しているとするなら、その理由は何か。大学進学を前にした受験学力への焦り、普通教科の教え込みスタイルなど偏差値競争の壁に高校教育そのものがぶち当たり、打破できない現状が垣間みえる。総合学習を大

学、社会がどう評価するのか、いわゆる学力低下世論の波に飲み込まれていく生徒像を捉える必要がある。

4. 生徒が付いたと感じる別の力（抜粋）と授業の目的との関連分析

総合人間科は本校が示す8つの学力をすべて包括している。学力における最終段階は総合化であり、学びの意義、学びの関連、学びの行動とつながる。ここではスキルの内容より他教科との関連、社会認識、人生・進路観から生徒の生の声を紹介する。

高1で「普通の教科では突き詰めて考えることや自分の考えを発表する場がない」と書いた生徒がいる。この問題は中等教育の根幹を突いている。普通の教科は相変わらず詰め込みの暗記主義で総合人間科だけが異質の学習意欲をもち能動的に学習できるということである。また、「学びの杜」「新教科」に対しても高3はこう指摘している。「新教科や学びの杜に比べて、自分で追究し、学ぶ機会が多かった。総合人間科は本当に学べて良かったと思っている。受け身でなく自発的に学べた。」この指摘も我々には痛い。つまり新教科、学びの杜も教師主導であり、自分自身で深めていく段階に至っていないという点だ。

21世紀の課題である「平和」については、高2の生徒はこう書いている。「平和について考える力、平和を自分自身と結びつけて考えられるようになった。」他の生徒は「他の学校では学べないような人や環境の尊さを学んだ」と書いている。しかし、これで満足してはいけない。行動できる力がどの段階でつくのかが問われる。

キャリア形成面からも「将来を見据えた選択ができ、非常によい」と6年ないし3年の積み上げを、自分の人生選択に重ねる評価もあるが、高3最後の段階で「結果を出せないものは切り捨てるという教科」という感想もある。学びの意欲を回復できないままに終わろうとする焦りは、総合学習を否定的に捉えてしまう。教科学習のベクトルが学習の総合化に至らず、学びが自分にとって役立つ実感が持てない状況では、どんな学力もリアリティを持たない。その子に応じた学びの構築をして学力を付けるシラバスが必要となるわけである。しかし出発点は生徒自分自身の固有の課題に基づくことが第一である。総合学習はこうした切り口になってくる。

5. 今後の課題

学力構造のとらえ方として、総合学習の果たす役割は大変大きい。

- ①学力とは、全体的な構造で把握すべきである
- ②学力とは人間の中で生きて働く力にならなければならない、

この2点を産み出せる総合学習を教師、生徒、保護者、はむろん社会が支援していく姿勢が望まれる、その先駆

的な出発点となった本校の総合人間科を創造的に再編成する時期が来た。それは1995年の目指した原点に立ち返ることである。

アンケート分析（ソーシャルライフ）中1～中3

1 ソーシャルライフの授業目標と求める力

- (1)あることがらや出来事に対して、まわりの友人や大人が色々な考えや気持ちを持っていることがわかる (①理解する力・②思考する力)
- (2)なぜ人による考え方の違いが生じるのかわかる (①理解する力・②思考する力)
- (3)自分がまわりの人から色々な影響を受けていることがわかる (⑤自分を知る力)
- (4)ふだんの生活の中で、自分がまわりの人たちと深くかわっていることがわかる (⑤自分を知る力)
- (5)自分のまわりの人たちの考えや気持ちを考えながら、行動することができる (⑧人や社会と関わる力)
- (6)まわりの人たちと理解しあうために、うまく接していくことができる (⑧人や社会と関わる力)

2 ソーシャルライフの授業内で求める力の平均値（データ）概略

- (1)理解する力
中1 4.16 中2 3.70 中3 4.02 全体平均 3.96
- (2)自分を知る力
中1 4.27 中2 3.89 中3 4.24 全体平均 4.13
- (3)人や社会と関わる力
中1 3.51 中2 3.23 中3 3.71 全体平均 3.48

いずれの力も非常に高い数値となり、目標は達成できていると言える。特に「理解する力」と「自分を知る力」については平均値が4ポイントを超え、生徒自身も力がついたという実感を得ていることがうかがえる。一方で、中2は数値こそ低くないものの、他の学年と比べると見劣りしてしまう。そのまま今の中学校全体の雰囲気を実に表しているようにもうかがえる。

3 データからわかることと目標達成度の検討

- (1)中1 「自分を知る力」や「理解する力」が非常に高いというのにはすばらしい。「人や社会と関わる力」の数値も高くすばらしいのだが、他の二つが飛び抜けていて、授業が適切に行われていて、生徒もそれに十分に応えていることがわかる。中学生になって環境もかわり、生徒の力の育成・向上の様子一方で、12歳～13歳ながら、「自分を知る力」がここまでついたという点には、実態としてどうかという疑問が出る数字でもある。成長期の自我の覚醒と合わせ、判断が難しい所ではある。
- (2)中2 数値としては高いが、他の学年が高すぎるので、どうしても低く映ってしまう。しかし、この学年の英

語や多学年の他教科と比べると、ソーシャルライフの
 数値は圧倒的に高いので、この授業への生徒の関心・
 達成度の高さがうかがわれる。

- (3)中3 ソーシャルライフを学ぶ3年間の総まとめに位置する学年で、ここまでの達成度が見られることは驚くべきことである。本教科と総合人間科における「理解する力」と「人と社会と関わる力」の数値が共通して非常に高いことからわかるように、本校独自の教科の取り組みが総合的に生徒の力を育てていることがわかる。

4 生徒がついたと感じる別の力(抜粋)とこの授業の目的との関連

- (1)中1 自分とは異なる人の気もちや考えを理解し多角的に考える力がついた
 (2)中2 相手の気持ちを考えながら行動し、他人とうまく接する力がついた。
 (3)中3 周囲をよく観察し、考えてから発言・行動する力がついた。

学年を追って段階的に成長しているのが手に取るようにわかる。この時期の中学生の精神的発達 がうかがえる記述内容である。

5 今後の課題

数値から見れば先述した通りすばらしい目標の達成である。しかし、ふだんの生徒の生活から、彼らがいかに客観的に自らを省みることができているかが、多少疑問に残る。実際の行動できて初めて達成されていると言えるだろう。また、このような取り組みが教科や総合人間科の学習、普段の行動にプラスに作用される方法を今後検討する必要がある。

アンケート分析(新教科)高1~高3

1. 新教科の授業目標と求める力

新教科群は高1・高2を対象とした教科で以下の4つの領域を扱っている。1年前期「自然と科学」、1年後期「心と身体の科学」、2年前期「国際コミュニケーション学」、2年後期「共生と平和の科学」。生徒はこれら4つの領域を半期ずつ、高1・高2で受講し、2年間ですべての領域を履修するもので、目標は以下の通りある。

- ・教科の枠を超えた多角的な視点から考える力を育てる。
 - ①理解する力②思考する力
 - ②思考する力③表現する力
- ・多様な学びを体験し、幅広い認識力を養う。
 - ①理解する力②思考する力
 - ②思考する力③表現する力
 - ⑤自分を知る力
 - ⑦探求する力

⑧人と社会と関わる力

・学際分野の専門的学習を通して、知的好奇心を刺激し、主体的に取り組む力を養う。

①理解する力②思考する力

⑦探求する力

⑧人と社会と関わる力

・特定の答えのない課題に対する判断力を養い、行動力を育てる。

①理解する力②思考する力

⑥創意工夫する力

⑧人と社会と関わる力

2. 結果(データ)の概略

肯定度は4を上回るものはなく、すべて3と4の間に留まっている。肯定度は高1より高2, 高3の方がすべての項目で高くなっている。肯定度が最も高かった力は、①理解・②思考-様々な問題が入り組んだ現代社会問題に関する知識を得ることができる、多様な視点から問題に気づく。次に高かった力は、②思考③表現-課題を筋道を立て深く考えることができる、社会には様々な課題があることを再認識することができる。

肯定度が最も低かったのは、⑤自分-多様な課題に対して自分の意見や考えを持つ、経験をとおして関連する事項への関心を高めることができる。⑦探求-多様な観点から学び学習意欲を高めることができる、友人や教員など「人と共に学びあう」ことができる。

新教科・学びの杜・総合人間科の相関関係を見ると、高1は新教科の中での各力の相関は高いが、学びの杜や総合人間科との相関はあまりない。高2は新教科の中での各力の相関が高いだけでなく、総合人間科との相関も高い。高3は新教科の中での各力の相関が非常に高く、学びの杜や総合人間科との相関も高い。

3. データからわかること

新教科においては、求める力は比較的付いていると考えられる。アンケート調査をした時期は、高1の生徒は「自然と科学」の講座を終了し「心と身体の科学」を学んでいるところであり、高2の生徒は「自然と科学」と「心と身体の科学」と「国際コミュニケーション学」の講座を修了し「共生と平和の科学」を学んでいるところである。高3はすべての講座を終了している。

肯定度は高1より高2, 高3の方がすべての項目で高くなっているところから、学習が進むにつれて肯定度が高くなる傾向にある。

4. 生徒が付いたと感じる別の力(抜粋)とその授業の目的との関連分析

・「新教科」2つ目の領域を学んでいる高1の生徒がついたと考える力の主なもの

- (1)多面的に物事を見て、異なる立場で考える力、客観的に物事を見る力、みんなで話し合うことによって多面的な物の考え方が身に付いた。
- (2)普段考えないようなテーマが多かったので、専門的な知識、教科をクロスオーバーした様々な知識を得て、お互いに深め合うことができた。
- (3)少人数授業で、発表して意見交換をするので自分の考えを持つ力を身につけることができた。
- (4)現代の社会の問題との関わりを知り、社会について少し理解できるようになった。現代社会に目を向け考える力。普段自然と通り過ぎてしまっている問題をしっかりとらえていく授業だから。
 - ・「新教科」について、4つ目の領域を学んでいる高2と、すべての領域を学んだ高3の生徒がついたと考える力の主なものは以下の通りである。
- (1)多角的視野で諸問題を見て考え、物の見方の多様性を知り、多面的に考える方法を思いつく力。
- (2)社会に現存している問題に目を向けて考え、自分の考えをもって、その問題に対して意見が言えるようになった。
- (3)議論する力－社会の様々な面について時には主観的に、時には客観的に見て議論する力、答えのない問題に自分なりの答えを見出す力・相手の意見と自分の意見を比べ新しいものを考える力
- (4)探求心－多角度からより深く、根気よく考え、物事の本質をさぐる力
- (5)判断力－様々な情報をやたらとうのみにしない力・メディアや人のうわさをうのみにしないで自分自身で正しい情報かどうかを考えようとする力
- (6)意欲－たくさんのことを理解しようとする気持ち 自主的に学ぼうとする力。社会問題についてもっと知らなければならないという関心意欲
- (7)問題解決能力－社会問題など世界の現状が知られると、その課題や解決方法を自分で見つけ出そうとする力
- (8)聞く力－自分とは異なる他人の意見をしっかりと聞けるようになった。自分と異なる意見を理解しようとする力

5. 今後の課題

新教科の4つの領域のそれぞれを3人の教員が担当して週1時間同時に3講座の授業を行うシステムなので、生徒は3人の教員の講座から1つを選んで半期間受講する。そのため発表など合同で授業をする時を除いて他の講座の活動を知ることができないという不満がある。

新教科の授業準備と実践は担当教員にとって自分の教科の授業より難しい。3人の教員で相談して計画を立てるが、初年度は自分の担当するテーマについて授業を組み立て、準備し、実践するだけで精一杯であった。次年

度は3人の教員のチームワークもよりスムーズになり、2グループで合同授業をしたり、グループ間の交流もある程度できるようになった。今後はそれぞれの領域において、共通する知識を有機的に結びつけて深めるプログラムを工夫してデザインし、毎年更新していく必要がある。また、新教科と既存教科の関連性・連続性を生徒の学習プロセスという視点から考察する必要がある。

アンケート分析(学びの杜・学術コース) 高1～高3

1 学びの杜・学術コースの授業目標と求める力

平成17年度から、「学びの杜・学術コース」を大学との連携事業として新たに開設した。この事業は、名古屋大学との新しいパートナーシップとして名古屋大学の研究者が附属の高校生に向けて用意した知の探求コースである。この講座を開設するにあたって、生徒に付けさせた学びの力を以下のように設定した。

・大学での専門的な学びを視野に入れて、興味・関心を育む。

- ①理解する力②思考する力
- ⑤自分を知る力

・問題発見・解決型の学習を通して、大学での学びの基礎となる多元的な思考力を育む。

- ①理解する力②思考する力
- ②思考する力③表現する力
- ④問題を設定する力
- ⑥創意工夫し解決する力
- ⑦探究する力

・幅広い学びの環境から、自分の適性を知る。

- ⑤自分を知る力
- ⑧人や社会と関わる力

2 結果(データ)の概略

身に付けさせたい「学びの力」で最も平均値の高かった力は、「探求する力」と「自分を知る力」であった。「探求する力」の5検法の平均値は、高校1年生4.06、高校2年生3.88、高校3年生3.82である。次に、「自分を知る力」の平均値は、高校1年生3.91、高校2年生3.95、高校3年生3.78である。

次に平均値の高い力は、「理解する力」と「創意工夫する力」である。「理解する力」は高校1年生3.83、高校2年生3.72、高校3年生3.73である。次に、「創意工夫する力」の平均値は、高校1年生3.70、高校2年生3.80、高校3年生3.78である。

最も平均値の低かった力は「表現する力」である。高校1年生3.00、高校2年生3.31、高校3年生3.22である。次に低かった学びの力は「課題を設定する力」で、高校1年生3.49、高校2年生3.44、高校3年生3.69となっている。各学びの力の学年差において有意な差は特に見られなかった。

3 データからわかることと目標達成度

探求する力のアンケート項目 (1. 探求することで知識・技術の広がりを確認することができる。2. 専門領域に関連する他領域について深く学び探究することができる。3. 専門家である講師の方の話を興味をもって聴くことができる。) から判断するならば、大学の教員による専門領域や関連領域を興味深く、探る体験ができたことと評価できる。また、能動的な姿勢で学問領域を学び、探求する活動が展開されていたと考えることができる。また、自己認識レベルではあるが、探求する活動によって学ぶ知識の広がりを認識することができたことと判断できる。

自分を知る力のアンケート項目 (1. 自分の選択した専門領域に関連する教養や知識 (技術) を広げることができる。2. 自分の興味・関心を考え、学びたいことや将来の自分に必要なことが分かる。3. 将来選択する分野への自分の理解を深めることができる。4. 将来選択する分野で必要とされる能力と自分の適性を現実的に考えることができる。) によると、本校の核となる一つの学習観「自分の将来を自覚的に選択する力」を育む学習の機会となっていることを示している。

理解する力のアンケート項目 (1. 高校と大学で学ぶ内容の関連性が分かる。2. 高校と大学で学ぶ内容の違いが分かる。3. 専門分野についての基本的な知識を得ることができる。) から判断するならば、高校と大学の橋渡しとなる学習経験や、これからの大学での学習に必要なとされる基本的な知識や考え方を身につける学習を経験することができたことと推測できる。

表現する力の平均値の低さは、講師の先生や他の受講生と積極的に意見交換をすることが十分にできなかったことを表していると考えられる。特に心理学探究講座、教育学探究講座においては生徒の選択者の数が70名から80名になり、講義形式の中心の授業展開になってしまったと考えられる。

4 生徒が付いたと感じる別の力 (抜粋) とその授業の目的との関連分析

上記のデータだけでは見えてこない内容を自由記述から拾ってみると、キャリア意識の形成において興味深いことが分かる。例えば、学びの杜の学習を通して、自分の興味のある分野に進学する気持ちが強くなった生徒と同時に、進みたいと思っていた分野と自分の適正や関心のミスマッチを発見する生徒もいる。

そのミスマッチを発見した生徒は、「心理学をやるのも楽しそうだと思ってこの講座を取ったけど、全部終わってみると、やっぱり自分に心理学は向いていないなって思うようになって、その道に進むのはやめました」と語っている。学びの杜での学習が、将来の自分のキャリアへの試行錯誤の機会を与えていると言えるのではないだろうか。

5 今後の課題

今後は学びの杜講座のカリキュラムと学習シラバスを、より発展的、先端的な研究成果を専門研究を担う名古屋大学の各研究科、教育研究を担う教育発達科学研究科、中等教育を担う附属学校の三位一体で開発する可能性を模索することが課題として残っている。その際に、中等教育で身に付けるべき学びの力と、高等教育との学びの連続性を視野に入れて学習シラバスを構築することが課題である。また、講座の成果を教育学的に分析して、今後につなぐ教育研究や評価計画の構築が課題である。